

義務としての復讐をめぐる対比研究の試み—2 —シチリア, アラビア半島, コロンビア, EU圏の難民社会—

関根 謙司*

The vengeance has been present all the world from the ancient times until now. In some areas such as Japan, Alabania, Corisica, Sicily, Arabian Peninsula and Columbia, the vengeance has been appeared as a duty. Even in the communities of the refugees in EU(European Union) and USA the vengeance as a honor killing is being found in the modern times and shall be also taking for the future. In the modern times the vengeance have often been seemed to change toward the honor murder especially in Middle East, Pakistan, and India

The essay shall analyze the aspects of the vengeance as an obligation in the comparative culture through the interpretation of the texts. It shall also examine the common features of the areas listed above. One lies in a narrow, closed world, while another suffers from the gap between a tradition and a modernization. Finally it shall study modern developing or already developed society that are deeply attached to the tradition of their culture.

On the part two I will criticize on the vengeance of Sicily, Arabian Peninsula and the communities of refugees in EU.

Key words : Trapani Law, Luigi Pirandello, Taabatta Sharan, al-Khansa', Garcia Marquez, Refugees

1. シチリアにおける復讐 (Vendetta)

イタリア語で「復讐」のことを“Vendetta”という。イタリア語の諺には、「最良の復讐とは敵を許すことだ」(La miglior vendetta è il perdon.) というのがあるが、シチリアの復讐の歴史は憎悪を超えたある種の恐ろしさを感じると言わざるを得ない。

西ヨーロッパで特異な復讐をもってきた、地中海最大の島シチリアでは、近世以降、スペインのハプスブルク家が支配した時代が続いた。シチリアの住民は、スペインの過酷すぎる徴税に対抗するために自団を組織し、農民たちは彼らにスペインからの徴税者の殺害を依頼し、それがのちにマ

フィアの発展につながった。農地管理人(カンパロ)は財産を守るために銃で武装する一方、税金を徴収する農場管理人(ガベロット、ファットレ)は農地管理人とも呼ばれ、農民に君臨していたのである。

スペイン支配の時代、年に一度、徴税にシチリアに来たスペインの官吏は翌日、遺体で発見されたことが少なくなかった。自警団に官吏の殺害を依頼したシチリアの島民は自警団のことは固く口を閉ざした。シチリアの農民たちがマフィアの窓口として知っている人物は1人あるいは1家族に限られ、だれが上層部であるか、具体的には知られていないとされる。誰がマフィアか分からないのである。何かあると助けてくれるが、結果的にマフィアを裏切ると残酷な私刑が待っていた¹⁾。

*人間学部コミュニケーション社会学科

妻の不貞に際しては、拘留中であっても妻を殺害しようとする。1911年に起きた事件を小説に描いたノーベル文学賞作家ルイジ・ピランデッロ（Luigi Pirandello, 1867 - 1936）の短編に「真実」があるが、14世紀に定められたトラパニ法には「夫は姦通を犯した妻とその愛人を殺害することが可能で、またその義務がある……ただし成敗はただちになること」と記されている。この法律が全面的に廃止されるのは1981年になってからである²⁾。姦通罪を思わせるトラパニ法の記載であるが、ここでも姦通に対しての復讐が義務として位置づけられ、20世紀の後半まで続いたことに驚く。

短編「真実」は裁判経過とともに描かれている。

「その二、三時間前に、彼の妻が、騎士の称号を持つドン・アガディーノ・フィオリカとともに不義密通の現場を取り押さえられた。両手にいっばいの指輪をはめ、頬を赤紫色にぬり、積み荷の小麦を太鼓にあわせて教会に運ぶラバのようにけげげしく着飾ったドンナ・グラツイエッラ・フィオリカ夫人、すなわち騎士の奥さんが、自分の手で不倫を証拠立てようと、スパノー副警視正と二人の警官をともなって、そこアルコ・ディ・スポーツの路地にやってきたのである。隣人たちは不幸な出来事をタララに隠しとおすことができなかった。彼の妻が一晩中、騎士とともに拘留されていたからだ。つぎの朝タララは、妻が黙りこくって出入口に姿を現したのに気づくやいなや、近所の女たちが駆け寄るすきも与えずに斧を握って飛びかかり、彼女の頭を叩き割った。」（竹内なおみ訳）（Porche pre Avanti, sua moglie era stata sorpresa in flagrante aulteria insieme col cavaliere don Agatino Filrica. La signora donna Graziella Fiorica, moglie del cavaliere, con dita piene d'anelli, le gote tinte di uva turca, e tutta inffiocchettata come una di quelle mule che recano a suon di tamburo un carico di frumento alla Chiesa, aveva guidato lei stessa in persona il delegato di pubblica sicurezza, là nel vicolo dell'Arco di Spoto, per la constantzione dell'adulterio. Il vicinato non aveva potuto nascondere a Tarrarà la sua disgrazia, perché la moglie era stata trattenuta in arresto, col cavaliere, tutta la notte. La mattina seguente

Tarrarà, appema se la era visita ricomparire zitta zitta davanti all'uscio di strada, prima che le vicine avessero tempo d'accorrere, le era saltato addosso con l'accetta in pugno e le aveva spaccato la testa.)³⁾

裁判を通じて、主人公の男タララは延々と彼が真実と信じる陳述を行った。無邪気な自供に対して、裁判官は被告タララにたずねた。「つまりこれがあなたの陳述ですね？（竹内なおみ訳）」（Questa dunque è la vostra tesi?）⁴⁾。情状酌量の価値があるとされたタララには、13年の懲役が宣告された。

2. アラブ世界の復讐

イスラム以前の時代、ジャーヒリーヤと呼ばれた時代、復讐の詩を残した詩人たちがいた⁵⁾。文字のない時代、口承で伝えられ、のちに詩人アブー・タンマーンが『武勇詩集』（Kitāb al-Hamāsa）に収めたものである。ジャーヒリーヤ時代、アラビア半島には美徳たる「男らしさ」（muruwwa）というものがあつた。寛大さ（karm）、勇敢さ（hamāsa）、忠実さ（wafāʿ）である。言い換えれば、大半はその正反対の価値観で生きていたといえる。イスラム時代になって失われていく、砂漠の遊牧民を彷彿させるオアシスのパリパリした大気を感じさせるジャーヒリーヤの詩は後世の偽作だという意見がある一方で、イスラム時代の詩とは別種のものであることも事実であり、無法な秩序、刹那的な快楽、卑怯者そのものの価値観には共感に近い虚しさを感じさせてくれる。『武勇詩集』に収められている、タアバッタ・シャッランの復讐の詩は中でも特異な存在であり、ゲーテも『西東詩集』の「注と論考」でドイツ語訳を紹介していることでも知られる⁶⁾。

タアバッタ・シャッラン（不吉なものを脇にかかえて持ってきた男）とはラクバ（渾名）で、本名はサービト・イブン・ジャービル・イブン・スフヤーンと言った。

وقيل: بل قالت له أمه: كل إخوانك بأيتي بشيء إذا راح فتركك، فقال لها: سأنتيك
 بالله شيء، ومضى فصاد أفاعى كثيرة من أكبر ما قدر عليه، فلما راح آتى بهن
 في جراب متأبطاً له، فألقاه بين يديها، ففتحته، ففسأعين في بيئها، فوثبت، وخرجت، فقال
 لها لئسنا الحلى: ماذا أنك به ثابت؟ فقالت: أأتاني بأفاعٍ في جراب. قلن: وكيف
 حملها؟ قالت: تأبطها. قلن: لقد تأبطت شراً، فلزمه تأبطت شراً.

(母親が息子にいった。「お前の兄弟は誰でも、
 あたしのところに何かもってきてくれるというの
 に、お前ときた日には、何一つもってきくれた
 ためしもないじゃないか?」。そこで、彼は母親
 にいった。「母さん、そんなら、今晚、何かもっ
 てきてやるよ。」そういって出かけた息子は、帰
 りぎわに、いつも通る道から逸れ、そこにいたと
 りわけ大きな蝮を一匹、捕まえた。彼は、蝮を袋
 の中に入れるや、脇の下にかかえて歩いた。家の
 そばまでくると、彼は袋を手を持ちかえ、袋を開
 けるや、母親のいる家に急いだ。母親は、それを見
 て、それこそ飛び上がって逃げ出した。部族の
 ある女性がいった。「サービトさんがもってきた
 というのは、あの蝮なんですってね。」母親はいっ
 た。「袋の中に入れて、もってきたのじゃ。」
 「どうやってもってきたのかしら。」
 「脇の下にかかえて、もってきたんじゃ。あ
 あ、実に不吉なものを脇のしたにかかえて、持
 ってきたのじゃ。不吉なものを脇の下にかか
 えて、さげてきたものじゃ。」⁷⁾
 (筆者訳)

部族社会から変貌しようとしていたジャーヒ
 リーヤ時代、それを懐かしむだけではなく、激し
 く固守しようとする人たちがいないわけではなかつ
 た。ドライにして現実的な遊牧社会の勇者がいる
 一方、どちらかという部族社会の除け者となり、
 彼ら同士で手段を組織した。彼らはサアーリク
 (al-Taṣālik) と呼ばれる盗賊団を組織し、悪行に
 走ることが少なくなかった。新しくできる価値観
 と規則に縛られないサアーリクの詩人たちは、
 ジャーヒリーヤ時代からウマイヤ朝時代の文学に
 異才を放っている⁸⁾。

【アラビア語原文】⁹⁾

انَّ بِالْمَسْبِ الَّذِي دُونَ صَلْمِ
 أَخْتِي لَدَيْهِ مَا يُطْلَى
 خَافَ الْمَبْءَ عَلَيَّ وَوَلَّى
 أَنَا بِالْمَبْءِ لَهُ مُسْتَقْبَلُ
 وَوَرَاءَ النَّارِ مِنِّي ابْنُ أُخْتِي
 مَصِيعٌ عَقْدُهُ مَانِحَلُ
 مُطْرِقٌ يَرْتَشِحُ سَسَا كَمَا أَطَا
 رَقَ أُنْقِي يَنْفِثُ السَّمَّ مَصَلُ
 خَبِيرٌ مَا نَابَنَا مَصْمِيلُ
 جَلَّ حَتَّى دَقَّ فِيهِ الْأَجْلُ
 بَرِّئِي الدَّهْرُ وَكَانَ عَشُومًا
 بِأَبِي جَارُهُ مَا يُدَلُّ
 سَامِسٌ فِي الْفَرِّ حَتَّى إِذَا مَا
 ذَكَرْتُ الشَّمْرِي فَبِرْدٌ وَظِلُّ
 يَأْسُ الْجَنْبَيْنِ مِنْ غَيْرِ بُؤْسٍ
 وَتَبْدِي الْكَفَيْنِ سَهْمٌ مَيْدَلُ
 ظَارِعٌ بِالْحَزْمِ حَتَّى إِذَا مَا
 حَلَّ حَلَّ الْحَزْمِ حَيْثُ يَحْلُ

هَيْثُ مُزْنٍ غَايِرٌ حَيْثُ بُجْدِي
 وَإِذَا يَسْطُو فَلَيْثُ أَبْلُ
 مُسْبِلٌ فِي الْحَيِّ أَحْوَى رِقْلُ
 وَإِذَا يَنْزُو فَسَمِيعٌ أَرْكُ
 وَلَهُ طَهْمَانٌ أَرَى وَشَرْمِي
 وَكِلَا الطَّعْمَيْنِ قَدْ ذَاقَ كَلُّ
 يَرْكَبُ الْهَوَلَ وَحَيْدًا وَلَا بَصَا
 حَبُهُ إِلَّا الْيَمَانِي الْأَفْلُ

【アラビア語からの井筒俊彦訳】¹⁰⁾

サルウの下手の谷間に、
 血の渴きを訴えて止まぬ一個の屍がある
 復讐の重荷は俺の雙型に残された
 いそいそと俺はその荷を取り上げて肩を負う。
 叔父さんの血の報復の責は、よし俺が引き受けた。
 怖いもの知らずの俺のことだ。俺の結んだ結び
 瘤は誰にも解けるものじゃない。
 爛々たるまなこを地に伏せ、毒液を全身から泌み
 だすさまは、
 猛毒を吐く蛇体のような、つまり蝮のような男
 さ、この俺は
 厭わしい知らせが来たものだ、陰鬱な知らせが。
 それと並べればどんな不幸も不幸には思えぬ。
 意地悪の運命が、またも一人の勇者を奪って行っ
 た、
 仲間から嘗て臆病者と言われたことのない勇者
 を。
 厳寒の季節には照々と照る太陽のような人であつ
 た。

大空に天狼星の燃える頃は涼風かおるオアシス
のような人だった。

身体はすらりとか細くて、とつても貧乏でものを
食べないわけじゃない。

手にあったものは気前よく何でもひとに呉れて
やる

その人となり豪放磊放、「勇気」がいつも道連れで、
彼は留まれば、「勇気」も共に宿を取る。

その財を惜しみなく上に分けるときは、沛然と降
りしきる雨のごとく、

一たび敵を攻める時は驀進する獅子王の姿とな
る。

部族の中にあつては波打つ黒髪をなびかせて長衣
の裾を地に曳き、

いざ戦いとなれば忽ち長身細腰の狼に変貌する。
誰しらぬ者もない二つの味を有った人だった。

つまり味方には蜂蜜、敵には苦水。

ただ独り「恐怖」の馬に跨って広野を往く時、

彼が伴侶はただ刀こぼれ深き南アラビアの名剣
のみ。

原詩はさらに13行続き、フライタークのラテ
ン語訳を底本にしたゲーテ訳¹¹⁾も同様である。
日本語訳の『西東詩集—注と論考』¹²⁾にもタア
バッタ・シャランの詩が訳出されている。

詩を通じ、自分たちがいかに勇敢で、相手がい
かに臆病か、リアルに描かれている。アラビア半
島の遊牧民の勇者は、血の復讐が達せないと、恐
ろしい渴きを感じ、人間の血に対しては同じ人間
の血で補わないとならない。復讐がなされない
ときは、死者の頭部から一羽の鳥(彼らはそれをハ
ーマ鳥と呼んだ)が飛び出したと信じられていた。
その鳥は「水が飲みたい(イスクーニー)」(isqūnī)
と鳴いたと記録されている¹³⁾。

復讐の詩は、イスラム以前には見られた女性詩
人の作品にも残っている¹⁴⁾。女流詩人ハンサー
はその代表的な女性である。2人の兄(ムアーウィ
ヤ、サフル)を失った彼女の悲歌はいまも多くの
ファンが少なくない。

إِنِّي أَرِئْتُ فَيْتَ اللَّيْلِ سَاهِرَةً
أَرَى النَّجُومَ وَمَا كُنْتُ رِعِيَتَهَا
وَقَدْ سَمِعْتُ وَلَمْ أَبْجِعْ بِهِ خَبْرًا
يَقُولُ صَخْرٌ مِنْهُمْ ثُمَّ فِي جَدَّتِ
فَأَذْهَبُ فَلَا يُبْعِدُكَ اللَّهُ مِنْ رَجُلٍ
قَدْ كُنْتَ تَحْمِلُ قَلْبًا غَيْرَ مُهْتَضِمٍ
بِمَثَلِ اللِّسَانِ تَضِيءُ اللَّيْلُ صُورَتَهُ
فَسَوْفَ أَبْكِيكَ مَا نَأَخَتْ مُطَوَّقَةً
وَلَنْ أَصَالِحَ قَوْمًا كُنْتُ حَرْبَهُمْ
كَأَمَّا كُحِلَّتْ عَيْنِي، بِعَمَوَارِ
وَتَارَةً أَنْتَغَشِي فَمُضِلَّ أَطْمَارِ
نُجْدَانًا جَاءَ يَنْمِي رَجْعَ أَخْبَارِ
لَدَى النَّضْرِيحِ صَرِيحَ بَيْنِ أَحْجَارِ
تَرَكَ ضَيْمٍ وَطَلَّابٍ بِأَوْتَارِ
سُرْكَبًا فِي نِصَابٍ غَيْرِ خَوَارِ
مُرَّ الْمَرِيرَةَ حُرًّا وَابْنَ أَحْرَارِ
وَمَا أَضَاعَتْ نَجُومُ اللَّيْلِ لِلْسَّارِي
حَتَّى تَعُودَ بَيَاضًا جُؤْنَةَ الْقَارِي

私は寝付かず 眠れぬ夜を過ごしているのです

ちょうど私の目が膿んだかのようにです。

星を見ます それらをもみても苦しみを感じるこ
とはなかったのに

いまはしばしば 着物の裾で身を覆うのです。
私は聞きました、その報せにとつても悲しくなり
ました。

その報せは、何度も何度も繰り返されました。
こうです、サフルさんは墓の中に埋葬された、と、
墓の傍らには 石と石が投げられた、と。

いざ、出陣です、神は兄さんを見捨てはしません、
兄さんのために、不正を退け、アキレス腱に狙
いを定めるのです。

兄さんは いつも正義の心をもっていました、
怖気のない刀を鞘に納めていました。

ちょうど閃光が 夜まで輝かず矢の穂先のように
たいへん冷徹で 自由でした、自由の申し子で
した。

私は 兄さんのために白子鳩のようになきじゃく
ります、

夜の星は 夜の旅行者のために輝いているでは
ありません。

夜は幸福に酔いしたりしません、ともに敵と戦うの
です、

黒い鶏が 白く成り果てるまでは。(筆者訳¹⁵⁾)

ハンサーは19世紀より、ヨーロッパで単一の
詩人として論じられてきた¹⁶⁾。「古来より、全オ

リエントにおいて死者のために謳われてきた悲嘆の叫び (nawh) から、古来アラビア人にとっては詩が唯一のジャンルだったとはいえ、ヘブライ人にとっても哀歌 (Qináh) と同様、悲嘆の叫びは嘆きの詩に発展したのである。」とドイツのネルデケは論じつつ、「けして芸術的とはいえないこの種の哀歌は女性によるものであることが多く」「死者に対する畏敬を表現した哀恨の辞」は「男性によっても価値あるもの」であり、「将来の展望として宿敵を倒し、貧しき者を向かい入れ、来客としてもてなすはずの人物を希求している」と結論づけている¹⁷⁾。

ハンサーはジャーヒリーヤ時代からイスラム時代に生きた詩人であるが、今日のパレスチナ抵抗詩の女流詩人を思い出すほどの現代性をいまでももっている。復讐の実行者は間違いなく、将来の伴侶に託されている。ハンサーの詩の大半は兄ムアーウィヤとサフルに向けられており¹⁸⁾、『武勇詩集』の一角を担っている。

3. コロンビア

コロンビアのノーベル文学賞作家ガルシア・マルケス (Gabriel García Márquez, 1927-2014) の作品に『予告された殺人の記録』(Cronica de una muerte anuniada, 1981) という中編がある。1951年、コロンビアのスクレ町 (Sucre) で起きた殺人事件を再現した作品で、1987年にイタリアの映画監督フランチェスコ・ロッシ (Francesco Rosi) によって映画化されて話題になり、またこの作品が出版された翌年にノーベル文学賞を受賞したことから世界的に知られた。二人の兄弟に殺されたサンチアゴ・ナサル (Santiago Nasar) はガルシア・マルケスの子供時代からの友人であったといわれる。

Yo lo vi en su memoria. Había cumplido 21 años la última semana de enero, y era esbelto y pálido, y tenía los párpados árabes y los cabellos rizados de su padre. Era el hijo único de un matrimonio de conveniencia que no tuvo n dolo instante de felicidad, pero él parecía feliz con su padre hasta que éste murió

de repente, tres años antes, y siguió pareciéndolo con la madre solitaria hasta el lunes de su muerte. De ella heredó el instinto. De su padre aprendió desde muy niño el dominio de las armas de fuego, el amor por los caballos y la maestranza de las aves de presa altas, pero de él aprendió también las buenas artrtes del valor y la prudencia. Hablaban en árabe entre ellos, pero no delante de Plácida Linero para que no se sintiera excluida. (わたしは彼女の記憶を通して彼を見た。彼は一月の最後の週に二十一歳を迎えたのであった。細身で色白、アラブ風の顔とちぢれた髪は父親譲りであった。彼は攻略まがいの結婚ではほとんど幸せを味わったことのない夫婦の間にできた一人息子だった。それでも父親とは、三年前に突然死なれるまでうまくいっていたようだし、寡婦となった母親との仲も、彼が死を迎える月曜日までじっくりいっていたようだ。彼の生まれつきの性格は、母親から受け継いでいた。また父親には、銃の使い方や馬を愛すること、鷹狩りの方法を習う一方、いかにして大胆にあるいは慎重に振る舞うかも教わった。彼ら父子の間ではアラビア語で話をしたが、プラシダ・リネロの前では、疎外感をかんじさせないように、そうすることは控えた。) [野谷文昭訳]¹⁹⁾

プラシダ・リネロとは、サンティアゴ・ナサールの母親である。ピカリオ兄弟の末の妹アンヘラ・ピカリオは貧しい家族のために金持ち風情で村にやってきたバヤルド・サン・ロマンと結婚した。初夜の晩、アンヘラが処女でないことを知ったバヤルドは彼女を実家に帰らせた。兄弟はアンヘラの相手を強引に聞き出し、それがサンティアゴ・ナサルであると聞かされた。兄弟は一家に恥をもたらした、サンティアゴ・ナサルを殺害することを決めた。村人の誰もがそのことを知っていた。本人のサンティアゴ・ナサルを除いて。

Bayardo San Román, el hombre que develovió la esposa, había venido por primera vez en agosto del año anterior: seis meses antes de la boda. Llego en el buque semanal con unas al forjas guarnecidas de la plata que hacían juego con las habillas de la correa

y las argollas de los botines. Andaba por los treinta años, pero muy bien escondidos, pues tenía una cintura angosta e novillero, los ojos dorados, y la piel cocinada a fuego lento por el salitre.

（妻を実家に帰した男、バヤルド・サン・ロマンが初めて姿を見せたのは、前の年の八月、つまり婚礼の六ヶ月前である。週に一度の定期便で着いたとき、彼は鞍袋を担いでいた。その鞍袋の銀の飾りは、半長靴の輪飾りやベルトのバックルと揃いになっていた。当時三十歳ぐらいだったが、とてもそうは見えなかった。というのも、腰は闘牛士のようにひきしまり、眼は光り輝き、肌は硝石のとろ火でこんがり焼いたみたいだったからである。）[野谷文昭訳]²⁰⁾

20世紀初頭、今日のレバノン・シリアに住むキリスト教徒各派の人々は戦乱で明け暮れる故郷を後に、北米・中米・南米に移住した。「宗教の坩堝」と呼ばれてきたレバノン山系にはキリスト教といっても、ニケーアの宗教会議（325年）でコンスタンティヌス大帝によって異端とされた宗派がいまなお存続していることでも知られる²¹⁾。移民として移住した新大陸の地でもコミュニティを形成しつつ、アラビア語文学を開花させたことでも知られる。アラビア語の出版物を刊行する傍ら、英語やスペイン語でも著述した²²⁾。彼らはしばしば、中東世界が培ってきた家族の名誉とそれを固守するためには殺人も辞さない文化をもたらした。南米のコロンビアもその例外ではなかった。

作品を通じて、復讐の延長上にある名誉殺人を犯すビカリオ兄弟は、中東系移民であり、キリスト教徒であることが伺える。殺人を犯して神父のもとに懺悔のために駆けつける兄弟は、熱心なカトリック教徒²³⁾を思わせる。

Bayardo San Roman no entró, sino que empujó con suavidad a su esposa hacia el interior de la casa, sin decir una palabra(...), y se fue a la muerte con su secreto. «Lo único que recuerdo es que me sostenía por el pelo con una mano y me golpeaba con la otero tanta rabia que pensé que me iba a mutar.», me contó Ángela

Vicario.

（バヤルド・サン・ロマンは家に入らず、黙ったまま、妻をそっと中に押しやった。（中略）娘は秘密を抱いたまま、あやうく死ぬところであった。「思い出せるのは、母さんに髪の毛をつかまれ、もう片方の手で、殺される思ったくらい、すごい剣幕でぶたれたことだけよ」とアンヘラ・ビカリオはわたしに語っている。）[野谷文昭訳]²⁴⁾

母親の強い勧めにもかかわらず、アンヘラ・ビカリオは金持ちのバヤルド・サン・ロマンとの結婚はあまり乗る気ではなかった。しかし、貧しい移民一家にとって、結婚は豊かになるまたとないチャンスであった。アンヘラは結婚を承諾するしかなかった。

Los gemelos volvieron a la casa un poco antes de las tres, llamados de urgencia por su madre. Encontraron a Ángela Vicario tumbada boca abajo en un sofá del comedor con la cara macerada a golpes, pero había terminado de llorar. «Ya no estaba asustada – me dijo –. Al contrario: sentía como si por fin me hubiera quintado de encima la conducerma de la muerte, y lo único que quería era que todo terminara rápido par tirarme a dormir.» Pedro Vicario, el más resuelto de los hermenos, la levantó en vilo por la cintura y la sentó en la mesa del comedor. – Auda niña – le dijo temblando de rabia –: dinos quién fue.(...) – Santiago Nasar – dijo.

（三時ちょっと前、母親の急の知らせを聞いた双子の兄弟が戻ってきた。彼らはアンヘラ・ビカリオが食堂のソファにうつ伏せになっているのを見た。顔は叩かれたために腫れ上がっていたが、もう泣いてはいなかった。「そのときは、もう怖くはなかったわ」と彼女はわたしに言った。「それどころか、死ぬ思いから解放されたみたいな気がして、何もかも早く終わってほしい。ひっくりかえって眠りたいと、ただそう思っていたの」すると兄よりも判断力のあったペドロ・ビカリオが、彼女を抱き上げ、食堂のテーブルに座らせた。「さあ」と彼は、怒りに身を震わせながら言った。「相手が誰なのか教えるんだ」彼女は、ほとんど

ためらわずに言った。(中略)「サンティアゴ・ナサルよ」彼女はそう答えた。)[野谷文昭訳]²⁵⁾

村人の誰もがビカリオ兄弟がサンティアゴ・ナサルを殺すだろうということを知った。知らないのは、本人のサンティアゴ・ナサルと彼の一族だけであった。兄弟はナイフを丹念に磨き、準備を万端に整えた。そして、サンティアゴ・ナサルを白昼、殺害したのである。誰も彼を助けようとせず、門のカギを閉ざした。殺害に成功すると、兄弟はその足で神父のいる司祭館に急ぎ、懺悔した。そして、警察に出頭したのである。

El abogado sustentó la tesis del homicidio en legítima defensa del honor, que fue admitida por el tribunal de conciencia, y los gemelos declararon al final del juicio que jubieran vuelto a hacerlo mil veces por los mismos motivos. Fueron ellos quienes vislumbraron el recurso de la defensa desde que se rindieron el recurso de la defensa desde que se rindieron ante su iglesia pocos minutos después del crimen. Irrumpieron jadeando en la Casa Cural, perseguidos de cerca por un grupo de árabes enardecidos, y pusieron los cuchillos con el acero limpio en la mesa del padre Amador. (...) – Lo matamos a conciencia – dijo Pedro Vicario –, pero somos inocentes. – Tal vez ante Dios – dijo el padre Amador. – Ante Dios y ante los hombres – dijo Pablo Vicario –. Fue un asunto de honor.

(弁護人は、名誉を守るための殺人は正当であるという論を展開し、陪審員たちはそれを認めた。そして双子の兄弟は、公判の終わりに、名誉のためなら何度でも同じことをするだろうと宣言した。犯行から何分か後、司祭館で、捕まる覚悟を決めたとき、彼らには自分たちを弁護する論がどんなものなのかおおよそ察しがついていた。彼らは、いきりたったアラブ人のグループに追われ、捕まる寸前、息せき切って司祭館に駆け込んだのだ。彼らは、アマドール神父の机の上に、血をぬぐったナイフを置いた。(中略)「おれたちは殺すつもりで殺しました」とペドロ・ビカリオは言った。「だけど、俺たちに罪はない」「神の前ではたぶんそうでしょう」とアマドール神父は言っ

た。「神の前だって人の前だって同じだ」とパブロ・ビカリオが言った。「あれは名誉の問題だったんだ」[野谷文昭訳]²⁶⁾

ガルシア・マルケスの文体は淡々としながらも、不思議に惹き込まれていく。

Nunca hubo una muerte más anunciada. Después de que la hermana les revoló el nombre, los gemelos Vicario pasaron por el depósito de la pocilga, donde guardaban los útiles de sacrificio, y escogieron los dos cuchillos mejores: uno de descuartizar, de diez pulgadas de largo por dos y media de ancho, y otro de limpiar, de siete pulgadas de largo por una y media ancho.

(これほど十分に予告された殺人は、例がなかった。妹が名前を明らかにした後、ビカリオ兄弟は、屠殺用の道具がしまっていた、豚小屋の物置きに入り、一番上等なナイフを二本選んだ。一本は、豚を解体するのに使うもので、長さ十インチ、幅二インチ半、もう一本は調理用の長さ七インチ、幅一インチ半のナイフだった。彼らはそれをぼろ布にくるむと、研ぐためにぼつぼつ店が開き始めた肉の市場へ出かけた。)[野谷文昭訳]²⁷⁾

この記述から彼らがアラブ人といっても、豚を食べるキリスト教徒であり、動物をザブハ(屠殺)するように復讐を果たす文化を踏襲していることを知る。名誉のために妹がかつて関係をもったとされたサンティアゴ・ナサルを殺害したビカリオ兄弟は留置場に拘留された。アラブ人家族からの報復を受けないためもあったが、家族は豊かではなかったので保釈金が払えず、拘留期間が3年近くに及んだ。

Tal vez los hermanos Vicario hubieran pensado lo mismo de las ocho de la mañana, cuando de sintieron a salvo de los árabes.

(午前八時、アラブ人の追手から逃れたと分かったとき、ビカリオ兄弟も多分同じことを思ったであろう。二人はそのとき、義務を果たしたことで誇りを感じ、ほっとした気分になったのであった。)[野谷文昭訳]²⁸⁾

町では、ピカリオ兄弟にアラブ系移民のナサル家が報復の殺害が噂された。

El temor de los gemelos respondía al estado de ánimo de la calle. No se descartaba una represalia de los árabes, pero nadie, salvo los hermanos.(...) Los árabes constituían una comunidad de inmigrantes pacíficos que se establecieron a principios del siglo en los pueblos de Caribe, aun en los más remotos y pobres, y allí se quedaron vendiendo trapis de colores ya baratijas de feria. Eran unidos, laboriosos y católicos. Se casaban entre ellos, importaban su trigo, criaban corderos en los patios y cultivaban el orégano y la berenjena, y su única pasión tormentosa eran los juegos de barajas.

（双子の兄弟の恐怖心は、町の空気に応じたものだった。アラブ人の仕返しが相変わらず噂されていた。（中略）アラブ人たちは、穏やかな移民からなるグループを作っていた。彼らは、今世紀の初めに、カリブ海地方の町や村に住み着いた。その中にはきわめて辺鄙で貧しい場所もあった。彼らは、そこで色とりどりの布地や安物の装身具を売って暮らした。団結力があり、勤勉でカトリック教徒だった彼らは、仲間同士で結婚し、自分たちで小麦を輸入し、中庭で仔羊を育て、オレガノや茄子を栽培していた。そんな彼らが情熱を燃やすとすればカルタ遊びぐらいなものだった。）[野谷文昭訳]²⁹⁾

しかし、処女でないためにバヤルド・サン・ロマンによって新居を追い出されたアンヘラ・ピカリオの相手はサンティアゴ・ナサルではないことを彼女は友人に示唆している³⁰⁾。ガルシア・マルケスの家族が住んだ、予告殺人の起きた、1940年から1951年のスクレ町はコロンビアでも無名の小さな町であり、殺人事件や暴力事件が絶えなかったとされている³¹⁾。

Había hecho más que los posible para que Ángela Vicario se muera en vida, pero la misma hija le malogró los propósitos, porque nunca hizo ningún

misterio de su desventura. Al contrario : a todo el que quiso oírlo se la contaba con sus pormenores, salvo el que nunca se había de aclarar : quién fue, y cómo y cuando, el verdadero causante de su perjuicio, porque nadie creyó que en realidad hubiera sido Santiago Nasar. Perteneían a dos mundos divergentes. Nadie los vio nunca juntos, y mucho menos solos. Santiago Nasar era demasiado altivo para fijarse en ella. (...) La versión más corriente, tal vez por ser la más perversa, era que Ángela Vicario estaba protegiendo a alguien a quien de veras amaba, y había escogido el nombre de Santiago Nasar por que nunca pensó que sus hermanos se atreverían contra él.

（母親は何がなんでもアンヘラ・ピカリオを生きたまま死なせようとした。ところが当の娘がその意図を打ち砕いてしまった。娘は自分の不幸について、少しも隠そうとしなかったからだ。それどころか、聞きたがる者には誰にでも、詳しく話して聞かせたのである。しかし、実際にサンティアゴ・ナサルだったとは誰ひとり思わなかった以上、本当は誰で、またいつ、どのようにして彼女と関係したのか、とい疑問が残っていたのだが、そのことだけは、語ろうとせず、ついに分からずじまいとなった。彼らは互いに別の世界に属していた。二人がいっしょにいるのを見たものはいない上に、いつでも他の誰かと一緒だったからだ。サンティアゴ・ナサルは、彼女に目をつけるには、気位が高すぎた。（中略）おそらく一番意図が悪いために、もっとも一般的であった解釈は、こういうものだった。つまり、アンヘラ・ピカリオは本当に愛していた男を庇っている、彼女がサンティアゴ・ナサルの名前を選んだのは、まさか兄たちが彼といさかいをするとは思わなかったからだ、というのである。）[野谷文昭訳]³²⁾

サンティアゴ・ナサルには双方の親同士が認め合った許婚のフローラ・ミゲルがいた。彼女はサンティアゴ・ナサルが家に帰されたアンヘラ・ピカリオを名誉回復のために無理やり結婚させられるのではないかと腹立ちながら泣き、これまでの彼からの手紙を整理した³³⁾。多くの村人はサンティアゴ・ナサルがアンヘラ・ピカリオ

の処女を奪った男とは考えていなかった。

(...) que Bayardo San Román estaba en su vida para siempre desde que llevó de regreso a su casa. Fue un golpe de gracia. «De pronto, cuando mamá empezóa pegarme, empecéa acordame de él.»

(彼女はバイヤルド・サン・ロマンに実家に連れ戻されてからというもの、彼のことを常に思い続けてきたということである。彼女にとってそれは啓示のようなものであった。「お母さんがあたしを叩き始めたとき、突然、あの人のことを思い出したの。それが始まりよ。）」[野谷文昭訳]³⁴⁾

何年も経った後、アンヘラはバイヤルド・サン・ロマンに出逢うことがあった。母親といっしょに眼の検査のために病院に生き、帰りに知り合いが経営するホテルに立ち寄って、水を飲んだのである。「y lo vio pasar a su lado sin verla (すると彼が、彼女には目もくれずに脇を過ぎ、ホテルを出て行ったのである)」「Nacióde nuevo. (彼女は生まれ変わった。)」結果、「«Me volví loca por él.» (「あの人に夢中になってしまった。)」」[野谷文昭訳]³⁵⁾のである。「A fines de esa semana, sin haber conseguido un minuto de sosiego, le escribióla primera carta. (その週末、一時たりとも落ち着くことのできなかった彼女は、彼に最初の手紙を書いた。)」[野谷文昭訳]³⁶⁾。しかし、手紙の返事はこなかった。2ヵ月後、今度は長い手紙を書いた。6ヶ月後には彼女の手紙は6通になっていたが、返答はまったくなかった。「(...) que el odio y el amor son pasiones recíprocas. (憎しみと愛が二つで一つの情熱であること。)」を発見したアンヘラは、「Escribióuna carta semanal durante media vida. (半生を通じて、毎週手紙を書き続けた。)」[野谷文昭訳]³⁷⁾。十年目を迎えたとき、「(...) la despertóla certidumbre de que él estaba desnudo en su cama. Le escribió entonces una carta febril de veintenpliegos en la que soltósin pudor las verdadaes amargas (...) (ある風の吹く明け方、彼女は、自分のベッドに裸の彼がいるのを確かに感じて目を覚ました。そこで彼女は彼に宛て、便せん二十枚を使った熱烈な手紙をしたための)」[野谷文昭訳]³⁸⁾。「Un Mediodía

de agosto, mientos bordaba con sus amigas, sintióque alguien llegaba a la puerta. No tuvo que mirar par saber quién era. (八月のある真昼時、友人たちと刺繍に精を出していた彼女は、誰かが戸口にやってくるのが分かった。それが誰かを知るために振り返る必要はなかった)」[野谷文昭訳]³⁹⁾。

– Bueno – dijo – , aquíestoy.

Llevaba la maleta de la ropa para quedarse, y otra maleta igual con casi dos mil cartas que ella le había escrito. Estaban ordenadas por sus fechas, en paquetes considos con cintas de colores, y todas sin abrir.

(「さてと」と彼は言った。「やってきたよ」彼は着替えの詰まった旅行カバンの他に、もうひとつ同じものをもってきていた。それには彼女が彼に書き送った、二千通余りの手紙が詰まっていた。手紙は日付の順に束ねられ、色つきのリボンで縛ってあったが、すべて封は切られていなかった。)」[野谷文昭訳]⁴⁰⁾

なお、当時のカトリック世界は別居はできても、離婚はできないことでも有名でも知られていた。

4. 復讐から名誉殺人へ

復讐はしばしば報復という連鎖を生む。復讐に対しては復讐が企てられる。娘や妻の不貞を監視するのは夫であり、妻の家族を含めた男の義務である。その結果、復讐の連鎖を避け、名誉を守るための名誉殺人が今日まで続いている⁴¹⁾。名誉殺人 (Jarâ'im al-farf) がイスラム世界で行われイスラム法でも規定しているため⁴²⁾、イスラム世界のものと誤解されているが、もともと今日の名誉殺人はもともと地域に根差したものであり、宗教に関係するものではない。今日、実際に名誉殺人が行われている地域として、アフガニスタン、バングラデシュ、ブラジル、エクアドル、エジプト、パレスチナ、インド、イスラエル、イラク、パキスタン、モロッコ、トルコ、ウガンダなどだけにとどまらず、移民・難民を積極的に受け入れているヨーロッパ (とくにドイツ、フランス、スカンジナビア諸国、イギリスなど) をあげている⁴³⁾。

イスラム世界はウンマ（イスラム共同体）の実現を希求しつつ、それまでの伝統文化を部分的に維持してきた。名誉殺人は家族の名誉を守るための義務としての復讐を家族内部の問題として捉える。名誉殺人が現在も多発しているのはパキスタンとされ⁴⁴⁾、国家やウンマの規定よりも、部族社会が強力な権威と権限をもち、家族の意向に従わない娘などが殺害の犠牲になっている。パキスタンでは政府が関与できていない地域が指定されており、年間、1000人前後が犠牲になっていると想定されている。ヨルダンでは犠牲者こそ数十人であるのに加え、名誉殺人は殺人罪として裁かれるものの、娘の婚前交渉などで家族の名誉を著しく傷つけられた場合は情状酌量などで減刑になる場合も少なくない。事実、17歳で妊娠し、生きたまま火に焼かれた少女がいたが、奇跡的に助けられ、いまはEU圏で暮らしている。そのドキュメンタリーはフランスで出版され、大きな波紋を生んだ⁴⁵⁾。また、アタチュルク革命以降、イスラム法を否定し、もっとも伝統的法律を継承しやすい家族法や民法を近代法として整備したトルコ（とくに東部地域）では年間、300～400人以上の女性が殺害され、さらにその3倍の女性が家族によって自殺に追い込まれている⁴⁶⁾。名誉殺人に極めて批判的であったサッダーム・フセイン政権の崩壊後のイラクでは名誉殺人はかえって増加している。エジプトでも多くの小説家が名誉殺人で犠牲になった女性を主人公に多くの作品を残してきたことはすでに触れた。

トルコ、イラク、シリア、イランの山岳地帯に住むクルド人はいまなお独立国家をもたず、得意な民間宗教であるヤズィード教を信仰している地域が多いことで知られる。ヤズィード教はゾロアスター教に民間伝承が入り、さらに、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教（とくにスーフィーことイスラム神秘主義思想）の影響を受けている。唯一神教であるが、輪廻転生説を教義としてもち、「経典の民」からは除外されることも少なくない⁴⁷⁾。墮天使マラク・ターウースを信仰し、ヤズィード教徒同士以外の結婚を認めていない。ここから女性が恋人の宗教に改宗するのに対し、名誉殺人が頻発している。さらに、難民としてヨー

ロッパのEU圏に移住したクルド系ヤズィード教のコミュニティでの名誉殺人の報告もある。名誉殺人に困惑しているEU圏では文化の相違に直面しており⁴⁸⁾、皮肉なことにEUの中でもっとも福祉制度が発展した北欧（とくにスウェーデン）は、頻発している難民の名誉殺人の対応に苦慮している現実がある。イギリスでは、クルド系難民の少女に交際相手がいると疑われ、イギリスではなく、クルド地区に連行され、そこで石打ちの刑になっているという報告がある⁴⁹⁾。サッダーム・フセインの時代、個人あるいは共同体による名誉殺人を厳しく取り締まっていたのが、サッダーム政権崩壊後は規制が解けたかのように、特にクルド地区で名誉殺人が頻発している。

サウジアラビアでは王族の女性と他国の男性との事件が起きている。有名なところでは、1977年、マシャイル・ビント・ファハド・アル＝サウード王女（Mashāʿil bint Fahad al-Saʿūd, 1958-1977）はレバノンに留学したとき、在サウジアラビア大使の甥のハーリド・シャーイル・ムルハッラル（Xālid Jāʿil Mulhallal）氏と恋に落ち、関係をもった。ジナを犯したとされ、19歳の王女は公開銃殺刑、交際相手は公開斬首刑となった。マシャイル王女の場合、交際相手といっしょに男装して出国しようとした。セキュリティ・チェックと通過する際、髪の毛を止めていたヘアピンが反応し、拘束されたのである。この事件はイギリスで制作されたドラマ「Death of A Princess」（1980年）の舞台となった。これによって、駐英サウジアラビア大使の召還などの外交問題に発展した。また、1997年には王族の女性がアメリカの海兵隊員の男性と駆け落ちしようとしたとして、王女は銃殺刑、海兵隊員は斬首刑が執行された。これはイスラム法を利用した、王族の名誉殺人と考えることが出来る。サウジアラビアが外国人との婚姻を厳しく宣言していることはよく知られている。名誉殺人は、個人を超えて国家の法あるいはイスラム法に従って実行されているのである。

インドのヒンズー教はカースト制度であるヴァルナとジャーティを規範とする。カースト制度はインド独立に際し、憲法では禁止されながらも、ヒンディー社会にいまなお強く残っている。カー

スト制度は身分制度を利用して職業の自由を奪ったものであり、それによって混乱や争いが起きないように考えられたといえなくもない。言い換えれば、インドの征服民であるアーリア民族が被征服民のドラヴィタ民族を支配する方法であったともいえる。同じカーストでない男女の結婚はできない、あるいは歓迎されない。経済成長が著しく、女性の社会進出が目立つ過程で異なるカースト間の恋愛・結婚が増え、それによって名誉殺人も増えたのは皮肉であった。もともとインドのカースト社会にはサティ（寡婦殉死）⁵⁰ という習慣があり、それから逃れるための娘に対して家族が行う名誉殺人がまかり通っていた。

明治以前の日本には密懐法があり、それが明治以降は姦通罪として残った。儒教の影響が絶大な

韓国にも最近まで姦通罪があり、キリスト教に熱心なアメリカ合衆国の東部・中部地域、中国、台湾、フィリピンでも名誉殺人は犯罪として扱われているが、文化的・歴史的に存在してきたことを裏付けている。

これまで筆者は世界で特異な「復讐」を分析してきた。そして、復讐が決して憎悪のみで果されていないことに気付く。言い換えれば、自分の属する共同体世界の一員として果たす必要のある義務として遂行しているのである。個人による死刑執行を容認している国は公式には無くなっていても、現在でも形を借りて残っている地域はなくはなく、しかもそれが近代国家の一員として現存しているのである。

時代も場所も異なり、題材としてテキストは過

表 1

地域・国名	日本	アルバニア	コルシカ	シチリア	アラビア半島	コロンビア
地形の特色	周囲を海に囲まれ山も多い	海に面した険しい山岳地帯	島の中央のマキに逃亡可能	島の中央にエトナ山あり	砂漠に川やワディが走る	アンデス山脈の最北端にある。
復讐の規定	御成敗式目	カヌン	慣例	トラバニ法	慣例	とくになし。
現在の法	明治以降禁止	存続	19世紀に禁止	20世紀後半に禁止	一部地域で容認	禁止。
不貞の身内	自害または座敷牢(農民は)	殺害(男女とも)	殺害(男女とも)	殺害(男女とも)	殺害(相手は殺さず)	相手の復讐と娘の殺害
身分	実行は武士階級のみ	階級は関係しない	階級は関係しない	階級は関係しない	階級は関係しない	階級は関係しない
宗教	仏教・儒教	イスラム教、 正教・カトリック	カトリック	カトリック	イスラム教	カトリック
政治	武家時代が長い	オスマン帝国の支配	ピサの支配後にフランス領	スペイン・フランスの支配	植民地支配あるいは反植民地意識	19世紀にスペインから独立。
地政学見地	太平洋や日本海に面し、欧米諸国は港の使用に魅力あり	アドリア海に面し、イスラム、カトリック、正教の間で争い絶えなかった。	地中海の中央北部にあって、仏伊で争奪を繰り返す。	地中海の中心であり、古来より穀物庫、豊かな土地を巡って争奪。	石油を産出し、スエズ運河に面するシナイ半島を有する	18世紀、カリブ海沿岸は海賊の襲撃があり、内陸部はコーヒーやコカイン栽培で生計。
鎖国の経験と植民地の経験	あり(徳川時代)	あり(ホジャ時代)	近世以降、フランスとピサに支配	スペインとアンジュ家支配	聖地はイスラム教徒のみに許可	スペインの植民地化に置かれる。

去のものも含んでいるが、違った形でいまでも残っているといわざるを得ない。その一方で、古来よりやり過ぎの復讐を禁止する一方、復讐のターゲットであることを自覚させることも行ってきた。その中には自衛権を認めていることも少なくない。法治国家となった今でも、家族の意向が刑罰に大きく影響している。そして、奇妙な共通点も認識せざるを得ない（表1）。

復讐は連鎖を呼び、復讐を果たしたあと、今度は自分たちも復讐される危険があり、しばしば家族同士の対立の歴史をうんできた。中には数世紀に及ぶ、復讐が繰り返されてきたアルバニアなどの例もある。復讐を近代法の立場から批判することは容易ではあるが、遺産相続・借金相続と同等に近い価値をもたらしてきたことは事実である。共同体社会は国家以上の大きな力を有してきたといわざるを得ない。復讐は報復の連鎖を生む傾向にあることから、中東や西南アジアでは復讐に代わって名誉殺人が家族内制裁として存在してきたわけである。

注

- 1) マフィアについては、竹山博英. マフィア—シチリアの名誉ある社会, 朝日新聞社, 1988 ならびに藤澤房俊. シチリア・マフィアの世界, 講談社学術文庫, 2009 を参考にした。
- 2) 武谷なおみ編訳. 短編で読むシチリア, みすず書房, 2011, 43-55 頁所収（原文は Kindle 版 Pirandello. *Tutti le novella* (RLI CLASSICI), “LA VIRITÀ” 所収。）またトラパニ法については同書, 209 頁参照。
- 3) 武谷なおみ編訳. 短編で読むシチリア, みすず書房, 2011, 46-47 頁. 原文は Kindle 版 Pirandello. *Tutti le novella* (RLI CLASSICI), “LA VIRITÀ” 所収。
- 4) 武谷なおみ編訳. 短編で読むシチリア, みすず書房, 2011, 55 頁. 原文は Kindle 版 Pirandello. *Tutti le novella* (RLI CLASSICI), “LA VIRITÀ” 所収。
- 5) ジャーヒーヤ時代の詩とそれが生まれる時代背景については、筆者はすでに『アラブ文学史—西欧との相関』, 六興出版, 1979, 13-37 頁で

触れたことがある。

- 6) Johann Wolfgang Goethe, *Der West-östliche Divan*, Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1961, 1971, (ゲーテ, 小牧健夫訳『西東詩集』, 岩波文庫, 1962) ゲーテは 60 歳を越してアラビア語を学習したことで知られ, 同時代のドイツの著名なアラビア語学者フライターク (George Wilhelm Freitag, 1788-1861) やリッケルト (Friedrich Rücker, 1788-1866) とも交友があったとされる. cf. Johann Fück, *Die Arabischen Studien in Europa*, Leipzig=Otto Harrassowitz, 1955, pp.166-168, Gustave E. von Grunbaum, “Zum Studium der arabischen Literatur in Westen”, p.10, *Kritik und Dichtkunst – Studien zur arabischen Literaturgeschichte*, Wiesbaden=Otto Harrassowitz, 1955
- 7) Abū al-Faraj al-Isfahānī, *Kitāb al-ʿAvānī*, Cairo, 1973 (1393H), vol.21, p.127, cf. R. A. Nicholson, *A Literary History of the Arabs*, Cambridge, 1907, repr= 1969, p.81 (なお, 本書には『歌の書』からの直接の引用はないが, 示唆に富む記述は特筆すべきである.)
- 8) タアバッタ・シャッランについては, ʿUmar Farrūx, *Taʿrīkh al-Adab al-ʿArabī*, Beirut, 1978, vol. I, pp.107-109 に負うところが大きい。
- 9) Abū Tammān, Al-Tibrizī ed., *Diwān al-Hamāsa*, vol.I, pp.342-347 なお, Reynold A. Nicholson, *Translation of Eastern Poetry and Prose*, New York=Greenwood Press, 1969, pp.15-17 に英訳が収められているが, 意識が多く困惑することも事実である。
- 10) 井筒利彦. マホメット, 弘文堂 (アテネ文庫), 1952, 20-24 頁 なお引用にあたっては旧字・旧仮名遣いを新字・新仮名遣いに変えたが, すべて筆者の責任で行った。
- 11) Johann Wolfgang Goethe, *Der West-östliche Divan*, Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1961, 1971, pp.125-129 それにしても, 詩人としてのゲーテ訳はなかなか読ませしてくれる。以下, ドイツ語訳を紹介する。 “Unter dem Felsen am Wege/Erschlagen liegt er,/In dessen Blut/Kein Tau herabträuft/.Große Last legt’ er mir auf/Und schied;/Fürwahr diese Last/Will ich tragen./..»Erbe meiner

- Rache/Ist der Schwestersohn,/Der Streitbare,/Der Unversöhnliche./..Stumm schwitzt er Gift aus/Wie die Otter schweigt,/Wie die Schlagen Gift Haucht,/Gegen die kein Zauber gilt.«/..Gewartsane Botschaft kam über uns/Großen mächtigen Unglücks;/Den Stärksten hätte sie/Überwältigt./..Mich hat das Schicksal geplüdet,/Den Freundlichen verletzend,/Dessen Gastfreund/Nie beschädigt ward./.. Sonnenbitze war er/Am kalten Tag,/Und brannte der Sirius/War er schatten und Kühling./..Tröcken von Hüften,/Nicht kümmerlich,/Feucht von Händen,/Kühn und gewartsam./..Mit festem Sinn/Verfolgt' er sein Ziel,/Bis er ruhte;/Da rubt' auch der feste Sinn./..Wolkanregen war er,/Gescgebde verteilend;/Wenn er aufiel,/Ein grimmiger Löwe./.. Stattlich vor dem Volke,/Schwarzen Haares, langen Kleides,/Auf den Feind rennend,/Ein magrer Wolf./..Zwei geschmücke teilt' era aus,/Honig und Wermut,/Speise solcher Geschmücke/Kostete jeder .../Scheckend ritt er allein,/Niemand begleiter' ihn/Als das Schwert von Jemen/Mit Scharten geschükert./
- 12) ゲーテ, 小牧健夫訳. 西東詩集, 岩波文庫, 1962, pp.269-278
- 13) 井筒俊彦. マホメット, 弘文堂 (アテネ文庫), 1952, 24-25 頁
- 14) al-Ibšihī, *al-Mustaṭraf fi kull Fan Mustaṭraf*, Cairo?, n.d.
- 15) 関根謙司. アラブ文学史—西欧との相関, 六興出版, 1979, pp.19-20, なお一部, 本書と訳語を変えたところがある.
- 16) Theodore Nöldeke, *Beigräge zur Kenntinis der Poesie der Alten Araber*, Hannover, 1864, Hildesheim=Georg OLMS Verlagsbuchhandlung, 1967, pp.152-182, A. J. Arberry, *Arabic Poetry – Primer for Students*, Cambridge at the University Press, 1963, pp.38-39 など, しかもヨーロッパの代表的な碩学が扱ってきた.
- 17) Theodore Nöldeke, *op.cit.*, p.152
- 18) *Dīwān al-Xansa?*, Beirut=al-Maktaba al-Taḳāfiya, n.d. による.
- 19) Gabriel García Márquez, *Crónica de una muerte anunciada*, Debolsillo, Barcelona, 2013, pp.13-14 (G. ガルシア = マルケス, 野谷文昭・旦敬介訳. 予告された殺人の記録・十二の遍歴の物語, 新潮社, 2008 年, 第 2 刷 = 2014 年, 15 頁)
- 20) *ibid.*, p.33 (上掲書, 30 頁)
- 21) 中東におけるキリスト教各派については, A.J.Arberry, *Religion in the Middle East*, Cambridge, 1969, vol.1, pp.239-595 がいまなおスタンダードにして示唆に富む.
- 22) 筆者はかつてアメリカ合衆国などのアラビア語移民 (マフジャル) 文学に触れたことがある (関根謙司. アラブ文学史—西欧との相関, 六興出版, 1979, 7-13 頁). このとき, 中南米のスペイン語によるマフジャル文学には論じることができなかった. ラテン・アメリカに移住したアラブ系キリスト教徒については, Ignacio Klich & Jeffrey Lesser ed., *Arab and Jewish Immigrants in Latin America: Images and Realities*, London, 1998 参照のこと.
- 23) アラブ系移民 (シリア, レバノン, パレスチナ) のコロンビアのカリブ海沿岸に移住したのは, 彼らの出身地がまだオスマン帝国の支配下にあった 1880 年に始まり, 第一次世界大戦後の 1930 年代まで続いた. それ以前は 18 世紀後半にスペインから逃れたセファルド系ユダヤ人たちが移住していた. Louis Fawcett & Eduardo Posada-Carbo, "Arabs and Jews in the Development of the Colombian Caribbean 1850-1950" in Ignacio Klich & Jeffrey Lesser ed., *Arab and Jewish Immigrants in Latin America: Images and Realities*, London, 1998, p.57
- 24) Gabriel García Márquez, *op.cit.*, p.56 (前掲書, 49-50 頁)
- 25) *ibid.*, p.57 (上掲書, 50 頁)
- 26) *ibid.*, pp.59-60 (上掲書, 51 頁)
- 27) *ibid.*, p.61 (上掲書, 53 頁)
- 28) *ibid.*, pp.92-93 (上掲書, 77 頁)
- 29) *ibid.*, pp.94-95 (上掲書, 79 頁)
- 30) *ibid.*, pp.114-115 (上掲書, 96 頁)
- 31) Gerald Martin, *The Cambridge Introduction to Garbiel García Márquez*, Cambridgege University Press, 2012, p.79
- 32) *op.cit.*, pp.104-105 (前掲書, 86-87 頁)
- 33) *ibid.*, pp.127-128 (上掲書, 106-107 頁)

- 34) *ibid.*, pp.106(上掲書, 88 頁)
- 35) *ibid.*, pp.107(上掲書, 89 頁)
- 36) *ibid.*, pp.107(上掲書, 89 頁)
- 37) *ibid.*, pp.108(上掲書, 90 頁)
- 39) *ibid.*, pp.110(上掲書, 91 頁)
- 40) *ibid.*, pp.110(上掲書, 92 頁)
- 41) 筆者はかつてエジプトにおける名誉殺人について、小説と実際に見聞した例について論じた。詳しくは、関根謙司『ニューアラブへのパスポート』、六興出版、1985、119-140 頁
- 42) 9 世紀から 13 世紀にかけて成立したイスラム法四大法学では不純異性性交をジナとして厳しく罰則している。もともとは『コーラン』の記載(第 17 章 32 節, 第 24 章 2 節, 第 25 章 68 節)によるものであるが、「旧約聖書」の戒律で定められた女性の石打刑がいまなお適応されている地域(アフガニスタン, パキスタン, イラン, ソマリア, ナイジェリア)もある。
- 43) Rana Husseini, *Murder in the Name of Honor*, Oxford, 2009, p.xiii なお、同書はヨルダン(歴代のヨルダン王家は名誉殺人を厳しく断罪し、その絶滅に取り組んできたが、根絶できていない。 *ibid.*, pp.60-67)を中心に欧米(イギリス, スウェーデン, アメリカ合衆国)の難民・移民たちならびに世界各地(パキスタン, アフガニスタン, イラク, イラン, シリア, イエメン, レバノン, サウジアラビア, クウェイト, エジプト, パレスチナ/イスラエル, 中南米)の実例報告としても貴重である。同書によると、バングラデシュではこれまでに数百人が犠牲になっているという報告があり、名誉殺人は地域、宗教を超えて世界中(バプア・ニューギニア, フィリピン, フィジー, ドミニカ, ルワンダ, サントメ, セネガルなど)に見られるとしている。(*ibid.*, p.156)。そして、犠牲者の多くが女性であることも事実である。
- 44) フランス通信社 (AFP) のサイト (2010 年 3 月 6 日)によると (<http://www.afpbb.com/articles/-/2706382?pid=5450801>), 毎年 5000 人が名誉殺人の犠牲になっていると国連人権高等弁務官の報告を報道している。2016 年の最新ニュースとしては、7 月 31 日、パキスタンで結婚式前日、妹 2 人が恋愛結婚は許さなれないということで兄に射殺されたり (<http://www.afpbb.com/articles/-/3095812>), 同じパキスタンで 7 月 20 日に不倫相手の男性が拷問され殺害されたり (<http://www.afpbb.com/articles/-/3094640>), さらには妹が SNS に自撮りの写真を投稿したとして絞殺されたこと (<http://www.afpbb.com/articles/-/3094328>) が報道されており、圧倒的にパキスタンが多い。パキスタンではキリスト教家庭もその例外ではなく、6 月 15 日に 10 代の少女が兄に撲殺されている (<http://www.afpbb.com/articles/-/3090513>)。これらの事件に対し、パキスタンの世論は賛否両論であるとともに、殺害した家族を弁護する傾向にあることも驚く。殺害に関しては、しばしば長老会議(ジルガ)が決定することも多い。
- 45) スアド、松本百合子訳『生きながら火に焼かれて』、ソニーマガジズ、2004 は本人によるフランス語の著書である。
- 46) トルコの映画監督ユルマズ・ギュネイ (Yılmaz Güney) が獄中から指示して制作させた映画『路』(Yol, 1982, 第 35 回カンヌ国際映画賞パルム・ドール賞受賞)にも夫が獄中いるときに不倫をした妻を家族が拘束し、夫の仮釈放のときに夫に殺害させるシーン(映画では雪山に低装備で歩かせ殺害する予定であったが、瀕死の中で助けようとする)が出てくる。なお、トルコにクルド系難民として EU 圏ならびにアメリカ合衆国で名誉殺人を犯した人たちに個別取材してまとめた、Ayse Onal, *Honour Killing: Stories of Men Who Killed*, London, 2008(邦訳 = アイシェ・ヨナル, 安藤建訳『名誉の殺人』, 朝日新聞出版(朝日選書), 2013 年)は、名誉殺人が国境を越えて <文化の問題>であることも明らかにしてくれる。
- 47) 「イスラム国」(IS) が占領地のヤズィード教徒の女性を奴隷制の復活の一環として奴隷とし、「イスラム国」の兵士の妻とさせたことで有名になった。「イスラム国」の考えでは、ヤズィード教徒は經典の民として認めていない。
- 48) 拙稿「義務としての復讐をめぐる対比研究の試み 1 - 日本, アルバニア, コルシカ」(『文京学院大学人間学部研究紀要』, 総合研究所, volume 17 [2016]) を発表したとき、同僚の宮本

和彦教授からデンマークでの名誉殺人について教えられた。EU 圏における難民による名誉殺人は同氏の指摘が大きな示唆になっている。ここに感謝しておきたい。

- 49) サティとはもとは古代インドの『ラーマヤナ』に起源があり、さらわれた妻のシータ姫を助け出した英雄ラーマヤナに対し、シータ姫が身の潔癖を証明するために自ら火のなかに身を投じた。それ以降、ヒンズー社会では夫が亡くなると妻が火の中に身を投じるサティの習慣が生まれた。イスラム王朝であったムガル帝国はサティを根絶しようとしたが叶わず、インド帝国の支配下でイギリスによってサティは禁止された。しかし、その代わりに若い未亡人が生きるすべなく（インドでは幼児婚がいまなお多い）、物乞いで生活しているのが現実である。
- 50) チャンダー・スータ・ドクラ、鳥居千代香訳『インドの社会と名誉殺人』、つげ書房新社、2015 参照。

参考文献

邦語、翻訳書、原著を含め、注に明記しているので、ここでは省略した。

補足

- (1) 引用文献の頁指定などは各国語にわたるため、英語表記に統一した。
- (2) アラビア語の引用は母音記号（シャクル）を表記する必要があるため、原著のスキャンを利用した。

(2016.9.17 受稿, 2016.10.19 受理)